

郷きょうに回かえつて偶書たまたましよす（賀知章がちしやう）

少小しやうしやう 家いえを 離はなれ 老大らうだいにして 回かえる

郷音きやういん 改あらたまる 無なきも 鬢毛びんもう 衰おとろう

兒童じやうどう 相あい 見みて 相あい 識しらず

笑わらつて 問とう 客きやくは 何いずれの 処ところより 来きたるか

少小離家老大回 郷告無攻鬢毛衰
兒童相見不相識 笑問客從何處來

解説 賀知章は道士になりたいといつて役人をやめ故郷に帰った。そのときの感慨を詠ったものである。

語釈 ※回郷||故郷に帰る。 ※偶書||思いつくままに書いたもの。 ※少小||年少。 ※老大||老年。 ※郷音||国なまり。 ※鬢||耳付近の髪の毛。 ※衰||毛が白くなったり薄くなること。 ※兒童||子供。 ここでは作者の一族の子供をさす。

通釈 若いときに故郷の家を離れ、年をとつて帰つて来た。お国なまりはいっこうに直れないが、鬢のあたりの毛は白くなったり、薄くなったりしてしまった。子供たちは、私と顔を見あわせても、互いに知らない。笑いながら、「お客さまはどちらからお出でになりましたか」と尋ねるのだった。